



冷たい夜だ。

カップ麺とマイルドセブンが入ったコンビニ袋を手首に通し、オレは両方の手で耳を覆った。明け方のコンビニ通いは日課のひとつだ。いつからだろう、昼間外出することを億劫に感じるようになったのは……。

三十歳、歌手志望。工場の夜勤でなんとか食いつないでいる生活だ。

「いじわるな風だなァ、寒すぎるよ」

肩をすぼめ、アパートの前まで戻ってきたところで、ふと、向こうから女が歩いてくるのが目についた。通りには他に人気はない。物騒なご時世だ、こんな時間に活動している人間には、たとえ女であっても用心しなくては。

オレは警戒しつつも、すれ違う瞬間、相手の顔をチラッとうかがった。

「今のは……」

女はオレに目もくれずに歩き去っていった。ちょっと傷つく。

品のいいモヘアのコートが、朝風になびいていた。

部屋に入り、カップ麺に湯を注いでいるあいだも、オレは先ほどの女のことを考えていた。

どこかで見た顔だ……誰だろう？

確かに覚えがある。過去の恋人や友人ならいくらなんでも気がつくだろうし、なんだかそうだったたぐいの感覚ではなかったような気がする。

もっと身近な——いや、気のせいかな。小学校や中学校時代の、会話したこともないクラスメイトのひとり、といったところが妥当だろう。

三分経ち、カップのフタをはがす。冷蔵庫にストックしてある具を取り出す。どれも百均で買ったものだが、これを載せて食べるのがオレなりの贅沢だ。

割り箸を口で割いて麺をつかもうとしたそのとき——オレの手は止まった。

「あっ」

トッピングした具材、ナルト・メンマ・のり・加えてチャーシュー代わりにハム。それぞれが人面の部位を形作っていた。その顔は、冒涇的なまでに先ほどの女と似ていた。

「ちえっ……」

涙まじりに麺をすする。

汁がギターにポツンとはねた。（了）